

令和元年度 【 学園研究費助成金< A > 】研究成果報告書

学部名 文化情報学部

フリガナ キダ ユウスケ
氏名 木田 勇輔

研究期間 令和元年度

研究課題名 交流の時代における観光とアートのまちづくりに関する研究

研究組織

| | 氏名 | 学部 | 職位 |
|-------|--------|--------|-----|
| 研究代表者 | 木田 勇輔 | 文化情報学部 | 准教授 |
| 研究分担者 | 黒田 由彦 | 文化情報学部 | 教授 |
| 研究分担者 | 米田 公則 | 文化情報学部 | 教授 |
| 研究分担者 | 今村 洋一 | 文化情報学部 | 准教授 |
| 研究分担者 | 阿部 純一郎 | 文化情報学部 | 准教授 |

1. 本研究開始の背景や目的等 (200字～300字程度で記述)

グローバル化が進む現代において、ますます多くの人々が国内外を気軽に移動し、訪問先の食べ物や文化、そして体験などを楽しんでいる。現代では地域の外から（場合によっては国境を越えて）その地を訪れた人々の視線が地域に注がれており、それによって日本国内の地域もまた大きく変化しつつある。本研究では日本国内における「観光とアートのまちづくり」に注目し、その可能性と限界を明らかにする。具体的には、「観光とアートのまちづくり」に現地のようなアクターがかかわり、それらのアクターがどのような実践を行っているのか、金沢市を中心とした全国各地での現地調査を通じて明らかにすることを目的とした。

2. 研究の推進方策 (300字程度で記述)

研究の方法としては調査対象地での聞き取り調査や現場の視察、資料収集を主とした。2019年8月23～25日には代表者・分担者全員が参加して金沢市の現地調査を実施した。調査に際してはそれぞれの専門分野の知見を持ち寄り、意見交換を行いながら進めることができた。上記の調査をもとに共著で論文を執筆し、『椋山女学園大学研究論集 社会科学編』51号に掲載される予定である。

9月以降は各メンバーがそれぞれ単独で金沢、沖縄、倉敷、瀬戸内海地方などに出張を行い、現地での視察や聞き取り、資料収集などの調査活動を行った。また、研究代表者の木田を中心に観光行動に関するウェブ調査を実施し、その分析を進めた。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

調査の成果は多岐にわたるため、ここでは主に共同調査を行った金沢市の事例について記述する。金沢市は、「加賀百万石」と謳われた加賀藩の城下町として栄えた歴史を持ち、伝統工芸（クラフト）や歴史的町並みの保存の取り組みで広く知られる都市である。その一方で、金沢市民芸術村や金沢 21 世紀美術館の開設など、文化芸術の分野でも先進的な取り組みを行っており、日本型「創造都市」の一つのモデルとされてきた都市でもある。金沢市はもともと観光地としてもよく知られていたが、2015 年の北陸新幹線開業によって観光客の増加に拍車がかかることになった。とくに外国人観光客の増加は目覚ましく、その数は 2009 年 91,625 人から 2017 年 448,267 人となっている（金沢市観光政策課の提供資料による）。

2019 年 8 月 23～25 日に実施した現地調査では、とくにクラフト振興について焦点を絞った調査を行った。インタビュー調査を行った金箔ジュエリー店の A 氏など、クラフトをビジネス化する新たな動きも生まれている。また、金沢市郊外で工房兼陶芸教室を営む九谷焼作家 B 氏にもインタビューを行い、作家側から見たクラフトの現状についても知る事ができた。

もう一つ、共同調査のテーマとなったのは金沢市の町並み保存の取り組みである。戦災の影響が軽微だったこともあり、金沢市では武家屋敷や町家が保存されており、これが大きな観光資源となっている。しかし、近年では町屋が取り壊される事例も増えてきており、行政は「金沢町家情報バンク」や取り壊しの事前届け出制度などを通じて建物の保全を進めようとしている。

その一方で、近年「オーバーツーリズム」という言葉が浸透しつつあるように、増え続ける観光客への対応策は金沢市にとって大きな課題となる。また、観光客の流れは流動的であり、地域経済が依存度を高めてしまうことの問題点も考えていく必要があるだろう。

4. キーワード (本研究のキーワードを 1 項目以上 8 項目以内で記載)

| | | | |
|----------|---------|-------|------|
| ①観光まちづくり | ②創造都市 | ③観光都市 | ④アート |
| ⑤クラフト | ⑥歴史的町並み | ⑦ | ⑧ |

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

公開した研究成果は以下のとおりである。

木田勇輔・阿部純一郎・米田公則・今村洋一・黒田由彦「“創造都市”金沢における観光まちづくり」『椋山女学園大学研究論集 社会科学編』2020 年 3 月, 第 51 号, ページ数未定.
米田公則「「観光のまなざし」論をめぐって」椋山女学園大学『文化情報学部紀要』2020 年 3 月, 第 19 巻, ページ未定.

次年度以降、参加メンバーが各自学会での研究発表や論文投稿を行っていく予定である。